

「立体模様の手漉き和紙」 を共同開発

ACTIVE KUMIAI



東京インターナショナル・ギフトショー展示風景

西嶋和紙工業協同組合と身延町は、「立体模様のついた手すき和紙」を共同開発し、特許出願していたが、このほど認められた。

発明の名称は、「立体紙の製造方法及びその製法を利用した立体紙」で、協同組合と行政機関が共同出願したのは全国でも珍しいという。

西嶋和紙工業協同組合

西嶋和紙は言い伝えによると、戦国時代に紙祖望月清兵衛翁が伊豆国田方郡立野村(現在の修善寺町)で三椏を原料とした「修善寺紙」の製法を学んで持ち帰ったこと由来しており、武田信玄が「運上紙」として認めたことから定着したという。以来、四百有余年の長い伝統と様々な技術・素材改善等の努力により、西嶋和紙は「墨色の発色」「にじみ工合」「筆ざわり」等に特に傑出したものとなり、今や全国の書道家や書道愛好家に珍重・愛用されている。

しかし、時代の変遷とともに書道用紙の需要が減少していることに危機感を持った同組合は、常に新しい分野への進出、可能性の探究を積極的に行っており、卒業証書やインテリア、文具用紙への展開を行ってきた。

今回の製法特許は、高いデザイン性を生かしてブライダルグッズや照明器具、壁紙、工業製品への応用が可能であり、新たな需要開拓が期待されている。

本会では、昨年9月に開催された「第70回東京インターナショナル・ギフト・ショー秋2010」に出展し、同組合の製品のPRを行い需要開拓の一翼を担った。



立体模様和紙の照明器具